

[特集] 1歳半の節と発達保障

特集にあたって

本誌編集委員 河原紀子

発達保障の理論と実践の歴史において、田中昌人らによる「可逆操作の高次化における階層-段階理論」は発達を科学的に認識する重要な役割を果たしてきた。中でも、「1歳半の節」という発達の質的転換期の認識とそれに基づく実践は、乳幼児健診での障害の早期発見・早期対応、療育システムの構築等に大きく貢献してきた。

1歳半の子どもたちは、「～デハナイ…ダ」と自らの行動を選択・決定し、自己主張が盛んになる。それは、“だだこね”や“かみつき”さらには“反抗”といった行動としても現れ、それ以前とは異なる対応が迫られる。このことは、1歳半頃の発達の課題を抱えている子どもたちにとっても同様であるが、障害や発達の弱さ・つまづきゆえに「問題行動」として長期化したりこじれたりする困難さがある。今日、これらの問題に対し、要素還元的な発達観や行動主義的指導が根強く存在し、子どもの主体性・能動性が置き去りにされていることが危惧される。本特集において「1歳半の節」という発達の質的転換期について今日的視点から捉え直し、発達保障の理論と実践における課題を提起することは大きな意味がある。

白石恵理子は、1960年代の近江学園の実践や大津市の乳幼児健診の取り組みなどから、「1歳半の節」の認識がもつ歴史的な意味を検討している。木下は、今日の発達心理学のアカデミックな領域では「1歳半の節」という用語は使われなくなったが、「自我の育ち」について実践的に問題にすると、改めて「1歳半の節」という認識の重要性が浮上するという。それは個々の機能を関

連させて捉える視点である。自閉スペクトラム症の場合、「1歳半の節」における時空間のつながりと自他の意図のつながりについて定型発達とは異なる機能連関を示し、それが問題行動の発生の要因となると別府は指摘する。さらに白石正久は、重症心身障害児の発達理解について、従来乳幼児期の発達段階と捉えられていた事例の中に、自-他関係を調整する自我が芽生えている事例が少なくないことを報告している。

後半の実践報告では、1歳半の課題は通過したものの、自分のつもり・自我の育ちに弱さがあり、10ヵ月の人とかかわり楽しむ力の育ちに遡って「1歳半の節」の土台作りを支援した事例について別所・竹内が考察している。坂本・塩見は、向き癖や発作があり、発達検査の項目上は「反応なし」となってしまう重症児であっても、集団の中で好きな遊びを通して「1歳半の節」を乗り越えた事例について報告している。さいごに木村は、“～したい”気持ちは育っているが、“したい”活動や主張の中身が伴わず、「問題行動」を頻発していた事例に対し、その背後にある「ねがい」に応えようと取り組んだ教育実践について報告している。障害が重くても、「問題行動」が激しくても、どの子にも、好きな遊び・活動を見出し、人とかかわり“～したい”要求を育てることが自我の育ちに不可欠であることが見えてくる。

本特集が、「1歳半の節」についての科学的認識を深め、発達保障の実践と理論が相互に発展する契機となることを期待する。

(かわはらのりこ 共立女子大学)